

関谷 博 九州大学大学院理学研究院 教授

共同研究から見た 分子科学研究所



せきや・ひろし

昭和54年 九州大学大学院理学研究科
化学専攻博士課程修了

昭和55年 東京芝浦電気株式会社半導体事業部

昭和57年 九州大学生産科学研究所気相系
反応中間体部門助手

昭和63年 九州大学機能物質科学研究所
素子開発部門助手

平成4年～5年 フンボルト財団研究員
(ミュンヘン工科大学 理論物理化学研究所)

平成7年 九州大学理学部化学科助教授

平成9年 九州大学大学院理学研究科化学専攻教授

平成12年 九州大学大学院理学研究院化学部門教授

平成18年～ 分子科学研究所運営会議委員

平成21年3月 日本化学会九州支部化学教育協議会議長

平成18年9月～ 分子科学会 幹事・運営委員、広報委員長

平成18年～ 分子科学研究所運営会議委員
共同研究専門委員会委員

平成21年～ 分子科学研究所客員教授

1992年の冬の早朝、博多駅で新幹線に乗り、お昼前に東岡崎駅に到着した。さらに坂道を登って分子研に辿り着いた。吉原教授のグループとの共同研究のためである。分子研というと、今でも、まずあの急な坂道が目につく。分子研に到着した日から数日間、PetekさんとBishtさんが深夜まで電子スペクトル測定を手伝ってくれた。九大の研究室では、Molectron社の窒素レーザー励起の色素レーザー1台が入って間もない頃、分子研の最新のレーザーシステム、真空装置や計測器を見学して設備の著しい違いに驚いた。吉原教授グループとの最初の共同研究以後、2001～2002年には藤井教授のグループとレーザー赤外分光の共同研究を行い、同時期から西教授のグループと赤外分光や高速時間分解分光の共同研究を継続的に行ってきた。これまで10数名の修士課程や博士課程の学生が共同研究に参加し、実験データの取得だけでなく、学外の研究者と接しながら、実験技術を学び、情報を得る良い機会となっている。装置が少ない自分のグループが15年もの長期間に渡り中断することな

く研究を継続できたのは、分子研の関係者や共同研究者の多大なるご支援のお陰である。この紙面をお借りして深く感謝申し上げたい。

共同研究においては、申請者が魅力ある課題の提案を行うことがまず重要であるが、特色ある装置の設置およびこれを最大限に引き出せるサポート体制なしに良い結果は期待できない。最近、分子研が設立当初の魅力を失っているとの感想を耳にする。最先端の設備をもつ大学の研究グループの増加に伴い、分子研の実験装置が“格段に突出している”印象は薄れてきている。しかしながら、必要十分な装置を設置できる大学の研究グループの割合は、全国的にみればわずかではないかと思う。自分の研究課題に近い光実験分野など分子研の実験設備と研究成果のレベルは、国際的にみて極めて高いものであり、全国共同利用研究機関としての魅力は、依然として保たれている。何よりも、共同研究における分子研関係者の絶え間ない努力に深く感謝を申し上げる。平成23年度には、分子研では4名の教授の定年に伴い、多く

のスタッフの入れ替わりが予定されている。新体制になった後、共同研究が更に発展することを期待している。

分子研には共同研究の他に、分子研研究会、課題研究など分子科学分野の研究をサポートする制度が充実している。残念ながら、平成21年度前期は分子研研究会の応募数が前年度に比べて激減した。その原因として、大学で様々な研究会やシンポジウムを開催するのに手が一杯のために、大学教員が分子研で研究会を開催する時間が無いことが挙げられている。実際、九大でも、毎週のように講演会や研究会が企画されており、教員はかなり多忙である。しかしながら、分子研研究会は、大学における研究会やシンポジウムとやや性格を異にする。テーマを絞って全国の研究者と共通の課題について積極的に討論できる絶好の機会である。また、旅費などの経費だけでなく、事務的な処理もサポートしてもらえ素晴らしい制度である。自分も過去2回分子研研究会の提案者となった。いずれの研究会においても、大いに刺激を受け、その後の研究生活に良い影響を及ぼしている。一方、研究会などの広報活動においては改善の余地がある。分子研のスタッフが、講演や講義で大学を訪問される機会に分子研の説明会を開催

する試みがあっても良い。九州大学理学研究院では、毎年、大学紹介と理学の啓蒙を兼ねて高校での出前授業が行われている。自分も毎年出前授業に参加している。今後、九州地区各全県の少なくとも一つの高校を出前講義で訪問したいと考えている。高校生は敏感に反応してくれるので、授業が楽しい。授業の後は新鮮な気分になり、教育の原点に戻った気分になる。大学での広報活動は、大学の実情に触れる良い機会かも知れない。

九州地区では、この10年間に、かつては分子構造総合討論会の常連であった実験分野の研究グループ数が減少している。さらに、物理化学系の博士課程の充足率が目立って低下している。分子科学分野の未来にとって深刻な問題である。最近、分子研に大学院生の入学制度ができたにも拘わらず、所内で若手研究者や学生と出会う機会がめっきり減った。分子研の運営会議では、大学院生の入学者が少ないことがしばしば話題となる。分子研の状況には大学の現状が反映されている。

学生の勧誘と言えば、20年程前に九大機能物質科学研究所の教授が「総合理工学研究科には学部生が配属されないので、博士課程の学生を増やすのは難しい。九州はアジア諸国に近いので、

アジア諸国から留学生を勧誘するしかない」と話されたことを思いだす。自分も修士課程進学希望者の勧誘のために、学内の他の学部を訪問したり、他大学に電話をしたりしたことがある。その後、工学部に新しい学科が新設され、総合理工学府の研究室に学部生が配属されるようになった。この経緯は、大学院の教育改革にエネルギーを集中するだけでは、未来を担う人材の養成に限界があることを示唆している。10年～20年の長期的プランに基づいて大学入試、学部・大学院に繋がる教育全体を見直す時期が来ている。

研究活動を軸としている分子研には、基礎研究における特色ある最先端分野の開拓を最も期待している。一方、分子科学分野の底辺が小さくなりつつある現在、大学（特に地方大学）の現状から離れて分子研の未来は考えにくい。この問題については、大学と分子研などの研究機関が連携して取り組むことが重要と思われる。

【連絡先】

〒812-8581
福岡市東区箱崎 6-10-1
九州大学大学院理学研究院化学部門
TEL/FAX: 092-642-2574
E-mail: sekiya@chem.kyushu-univ.jp